

# だんろ

宇都宮地方法務局・栃木県人権擁護委員連合会主催  
令和7年度こどもの人権絵画コンテスト 優良賞受賞作品



「みんな仲よし 笑顔と虹の輪」 上三川町立明治小学校 4年 神戸 陽菜



小学校における「人権の花」贈呈式

上三川町人権擁護委員の皆さん



2026

上三川町  
上三川町教育委員会

# あいさつ

昨年、大阪・関西万博が開催されました。「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、世界中の人々が集まり、多様な価値観や文化の違いを超えて、共に生きる社会の姿が発信されました。そこでは、一人ひとりの存在や思いが尊重されることの大切さが、さまざまな展示や取組を通して示されました。この万博の理念は、私たちの身近な生活における人権の問題とも深くつながっています。

近年、私たちの暮らしは大きく変化しています。SNSの普及により、誰もが気軽に情報を発信できる一方で、心ない言葉による誹謗中傷や、相手の気持ちを想像しない行動が社会問題となっています。また、国籍や障がい、性別、考え方など、多様な背景を持つ人々が共に暮らす社会の中で、「違い」をどう受け止め、尊重していくかが、これまで以上に問われています。

本町では、地域から人権侵害をなくし、町民の皆さまが、安心して日常生活を送ることができるよう「上三川町人権教育・啓発推進基本計画」を令和4年度に策定し、各種取組を推進しております。偏見や差別のない社会の実現に向け、様々な施策を講じて参りますので、今後ご理解・ご協力をよろしくお願い致します。

さて、今年度も人権啓発資料「だんろ」を発刊いたしました。この資料には、町内の小中学生が、違いを認め合う大切さ、そして誰もが安心して過ごせる社会を願う真っ直ぐな思いが綴られています。

町民の皆さまにおかれましては、収録作品一つ一つを「一読いただき、人権の大切さを家庭や地域で考え、語り合う機会」としていただけますと幸いです。

令和八年三月

上三川町長 星野光利



## 目次

### 人権に関する作文優秀作品

ちがいをみとめあつて	小学四年生	1
障がいなんて関係ない	小学五年生	3
弟が選んだクラブ	小学六年生	5
私と野球	中学一年生	7
見た目や国籍で決めつけない社会へ	中学二年生	9
「普通」って何？	中学三年生	11

### 人権に関する標語優秀作品

.....	13
-------	----

## 人権に関する作文優秀作品

ちがいをみとめあつて

小学四年生

私は、小さいころ、インターナショナルのようち園に通っていました。そこには、日本人の先生だけでなく、外国人の先生もたくさんいて、英語で話したり、いっしょに遊んだりしていました。先生の中には、はだの色がちがう先生や日本語が話せない先生もいました。

でも、私は、見た目や言葉が私たちとちがっていても、それを愛だとは感じたことはありません。英語で話しかけられても、なんとなく気持ち伝わってきました。わからない時には、ジェスチャーや表情で伝えてくれて、毎日楽しくすごしていました。

お母さんに「ようち園に入った時、はだの色がちがう先生を見て、おどろかなかった？」と聞かれました。私は、「気にしたことがなかったよ。」と答えました。お母さんはそれを聞いて「小さいころから自然に色々な人とすごせていたんだね。」と、うれしそうにしていました。

これから私たちは、たくさんの人と会おうでしょう。色々な人とふれあうことで、その人のやさしさやみに気づくことができ、自分が知らなかったことを知るチャンスになるはずです。おたがいのちがいをみとめ合うことで、仲良くできるのではないのでしょうか。見た目や性格も言葉も国も、ちがいがあつて当たり前です。金子みすゞさんの詩にもあるように、「みんなちがってみんないい」と受けとめられる社会になってほしいです。

そのころから私は、国がちがう先生がいても、「いつもの先生」としか思っていなかったことを思い出しました。はだの色や言葉や国がちがうことを特別なことと気にしないで、当たり前のようにうけとめていたんだなと自分でもうれしくなりました。

小学生になった今も、英語を外国人の先生に習っています。その時間は、日本語を使いませんが、ようち園のころの経験のおかげか「どうしよう」よりも「なんとかなるか」と思えるようになりました。自分から「ハロー」とあいさつすると、相手も笑ってくれてすぐに仲よくなります。それは、小学校に入学して、知らなかった子と仲良くなれたときと同じだと思います。自分から声をかけることも大切だと思います。

世の中には、外国人というだけで、こわがったりさけたりする人もいます。自分とちがうことがあるとか、よく知らないというだけでこわがってさけてしまうのは、とてももったいないことだと思います。もしかしたら、その人と仲良くなって、自分の世界が広がるかも知れないに。そして、ちがいをみとめられずこわがったりさけたりすることが良くないのは、同じ国にくらす日本人どうしにも言えることです。

障がいなんて関係ない

小学五年生

障がい者の中には、体が不自由な人もいれば、見た目では分かりにくい人もいます。そのような障がい者が差別をされて、いじめられてしまうことがあります。わたしの兄も障がい者です。兄は車イスなど障がい者とすぐに分かるようなものは身に付けていないので、すぐに障がい者と分かるわけではありません。でも、知的障がいやふつうの人よりは、学習面などでも困ることはいくつもあります。

わたしはそんなことで差別をしてはいけないと思います。障がい者は「ふつうの人とはちがう」と思われやすいと思います。もし自分が障がい者だとしたら、いつも大変なだけどがんばっている中でそんなことを他人に思われていると知ったら、とても悲しいと思います。

わたしも、障がい者はふつうの人とはちがうと思うことはありません。でも、国語の授業でパラリンピックという大会を知って、「障がい者でも、大会に出て活躍しているんだ。」と思い、ふつうの人とはちがうという考えはまちがっていると感じました。うでがなくても、目が見えなくても、できることはたくさんあるということを知ることがで

きました。私の兄も大変なことはたくさんあるのに、それをこくふくしようとがんばっていたことに気付くことができました。さいきんも、高校受験のために学校で一生懸命勉強していることを知りました。パラリンピックや兄のことを知って、わたしも見習わないといけないと感じました。

また、障がい者は、へん見に満ちた言葉をたくさん言われてきて、苦しい思いをしてきたと思います。わたしも、何気ない会話の中で、障がい者にとってはひどい言葉をかけてしまったこともあるかもしれません。それが、どれだけ障がい者にとっては苦しい言葉だったのかを今は理解することができません。

障がいなど関係無く、みんなが平等でいるべきだと知ることができたので、これからは差別せず、困っている人を助けられるようになりたいです。そして、障がい者へのへん見が一つでも少なくなるように、障がい者が苦しまなくてもすむように、自分から行動していきたいです。そのために、まずは自分も兄に対して、変に気をつかわないでふつうの人と同じように接していきたいです。でも、大変なのは知っているのです、心の中ではずっと応えんしていきたいです。周りで、障がい者に対してへん見をもってぼう言

を言っている人がいたら、注意できるようにしたいです。そして、障がいなど関係なく、だれもが笑顔で楽しく過ごせるような社会をつくりたいです。

## 弟が選んだクラブ

### 小学六年生

「えっ、手芸クラブ？女の子みたいだね。」

ある日、弟が手芸クラブに入ると聞いて、思わずぼくは、そう言ってしまうました。

弟はちよつとムツとした口調で、「別にいいじゃん。」と言いましたが、少し悲しそうな顔をしていました。そのときぼくは、後悔しないといいけどなあ、と思いました。

その話を父にしたところ、「昇太郎はおじいちゃんが何の仕事をしているか知っているかい？それはね、縫製業といって、働く人たちが着る作業着を作る立派な仕事なんだよ。昇太郎の好きなゲームの会社の作業着も作ったことがあるんだよ。」と教えてくれました。

おじいちゃんも服を作っていたんだ、と知ってぼくはハッとなりました。弟がクラブでやろうとしていることを『女の子のすること』と決めつけていたのは、ぼくの勝手な思いこみだったのです。そして、その思いこみで、弟の楽しみにしていた気持ちに水を差してしまったことが、とてもはずかしくて、悲しくなりました。

その夜、弟に、「きつきはごめんね。手芸クラブ楽しんで

ね。」と伝えました。弟は少しびっくりした顔で、照れながら「うん。」と答えてくれました。「ぼくは亀が好きだから、亀のぬいぐるみを作ってみたいんだ。」と教えてくれて、ぼくも「それいいね。」と言い、とてもうれしい気持ちになりました。弟のキラキラした表情を見て自分が間違っていたな、と改めて思いました。

人にはそれぞれ好きな物ややりたい事があります。でも、男だから、女だから、という理由で、それを周りが決めつけてしまうと、本当の気持ちに嘘をついてしまうことがあると気がつきました。もし弟がぼくの一言で、手芸クラブに入るのをやめていたら、あんなに楽しそうな弟の笑顔は見れなかったかもしれない。自分とちがう考えや行動を見たときに「それは変だ。」と思うのではなく、「そういう考えもあるんだ。」と受けとめることが、みんなが自分らしくいられる世界につながるのだと思います。

これからは、思いこみや決めつけでなく、違いをみとめて、弟のように自分の好きなことを大切にしている人を心から応援できる人になろうと決心しました。

私が野球を始めたのは小学二年生の時でした。三歳上の兄が学童野球で活躍する姿に憧れ、私も同じチームに入団しました。野球は楽しく、充実した日々を送っていました。しかし、小学三年生の頃から、人の視線が気になり始め、次第に教室へ行けなくなりました。誰かと目が合うだけで「嫌われているのかな」「何かしてしまったのかな」とマイナスに考え、監視されているような気分になったのです。一度教室へ行けなくなると、恐怖が募り、小学四年生になるまで保健室で過ごしました。この期間は辛かったです。家族は決して私を責めず、温かく支え続けてくれました。

四年生になり、家族の支えで教室に戻ることができました。が、野球の方は上手くいきませんでした。チームメイトが上達する中で、私はなかなか上達せず、試合に出る機会もほとんどありませんでした。小学六年生になり、最後の大会が近づくと練習は厳しさを増し、キャプテンである兄が懸命にチームを引っ張る姿を見るたびに、上達しない自分に嫌気が差し、野球が嫌いになっていきました。

兄の卒団と同時に私も野球を辞めました。退屈な日々が続けてきたのだと強く感じました。この経験を通して、私は人権について深く考えるようになりました。教室へ行けなくなった時、周りの視線に怯え、自分を否定していました。しかし、家族やチームメイトの温かい支えがあったからこそ、私は再び立ち上がり、前を向くことができました。彼らは私をありのままに受け入れ、存在を肯定してくれました。それは、まさに「人権」が保障されることの重要性を教えてくれたのだと思います。

人は皆、異なる個性や背景を持っていますが、誰もが安心して自分らしく生き、他者から尊重される権利を持っています。私が野球を通して経験した「居場所」や「仲間」の存在は、まさに人権が守られている状態でした。もしあの時、私を支えてくれる人がいなかったら、私はずっと暗闇の中にいたことでしょう。

中学校に入学し、新たな環境で多くの人と出会う今、私はこの経験を活かし、周りの人々の人権を尊重し、誰もが安心して過ごせる社会を築く一員になりたいと強く思います。困っている人がいたら手を差し伸べ、多様な意見を認め、互いの違いを尊重し合える心を育みたい。そして、私自身も、自分らしさを大切にしながら、自信を持って生きていきたいです。野球が教えてくれた「諦めない心」と「仲

を送っていたある日、監督から父に連絡があり、人手不足のため試合に出てほしいと頼まれました。再び野球をやりたい気持ちと、周りの目が気になる複雑な気持ちの間で揺れましたが、家族に背中を押され、再び試合に出ることを決めました。

練習再開の日、私は緊張していましたが、チームメイトは変わらず明るく、笑顔で私を迎えてくれました。その温かさに安心したのも束の間、新人戦が始まる直前に体調を崩してしまいました。私が病気になっても試合は予定通り行われ、チームは決勝まで勝ち進みました。完治後、決勝戦だけ出場しましたが、私は活躍できず、チームの足を引っ張ってしまいました。それでも、チームメイトは「また戻ってきてもいいんだよ」と言ってくれ、その言葉に救われ、再び野球部に入ることを決意しました。

小学六年生になり、大きな大会がやってきました。私以外の六年生は皆野球が上手く、チームは順調に準決勝まで勝ち上がりました。強豪チームとの準決勝では、先制するも逆転され、試合終盤まで追い詰められました。しかし、私たちは諦めず粘り強く戦い、劇的な逆転勝利を収め、ついに優勝することができました。優勝が決まった瞬間、私は心の底から「楽しい！」と叫び、この時のために野球を動いていきます。

間との絆」を胸に、これからも人権について学び続け、行

## 見た目や国籍で決めつけない社会へ

### 中学二年生

「外国人って、なんとなく怖い」と感じたことはないだろうか。私は少し前までそう思っていた。しかし、ある出来事がきっかけで、その考えはただの偏見だったのだと気付かされた。私はこのことを受け、今では、見た目や国籍だけで人を決めつけるのではなく、一人一人の行動や言動を見て向き合うことこそが、これからの社会に必要な姿勢ではないかと考える。

ある日、友人と遊びに出かけたとき、トイレで何人かの外国人と出会った。英語を話していたので、おそらくアメリカ人だったのだろう。私はなぜか、心の中で身構えてしまった。特に何かをされたわけではない。ただ、「話を通じないかもしれない」「何をされるかわからない」といった不安があった。そのとき、彼女たちは私に話しかけてきた。「ボーリング場はどこか分かりますか。」と、たどたどしい日本語混じりの英語だった。私は驚きながらも、知っている単語や、学校で習った表現も使って説明した。今思い返してみても、あの時の私の英語の説明は完璧なものではなかったと思う。しかし、彼女らは熱心に私の説明を聞き、最後

には笑顔で、「ありがとう。」と日本語でお礼を言ってくれた。その瞬間、自分の中にあった「外国人は怖い」という考えが「ただの偏見でしかなかった」ということに気付かされた。

この経験を通して、自分がまだ話したこともない相手に対して、見た目や言葉のちがいで不安や恐れを感じていたことを深く反省した。そして、そうした偏見は多くの人の中にも潜んでいるのではないかと思うようになった。例えば、日本に住んでいる外国人の中には、「外国人だから」という理由で就職を断られたり、お店の利用を拒否されたりする人もいると聞いたことがある。言葉や異文化の壁を感じながら日々生活している人にとってそのような行動をとることは、人種差別にあたるだろう。

私は日本人の中になぜ外国人に対してよい印象を持たない人がいるのかを、自分なりに考えてみた。私は、「外国人犯罪が多い」「マナーが悪い」といったイメージが影響しているのではないかと思う。確かに、日頃のテレビや新聞、ネットニュースなどの事件の報道などでそうした印象が強まることもあるだろう。しかし、それは国籍ではなく、個人の問題である。日本人の中にもマナーの悪い人や犯罪を犯す人はいる。つまり、「外国人だから」という理由から警

戒することは、不公平なことであるということだ。

今は「多様性の時代」と言われている。外国の人々が日本に来て働いたり暮らしたりすることは、経済や国際理解の面においても大きな意味がある。私は外国人を受け入れることは日本にとって大きな利点であると考え。しかし同時に、外国人がたくさん日本にやってくることで、彼らばかりを特別扱いする政策が進みその結果、日本人の不満が生まれる可能性があるとも思う。だからこそ大切なのは、国籍や文化に関係なく、誰もが平等に暮らせる社会を目指すことだと私は思う。一人一人の行動や思いやりによって、信頼や理解を築いていくこと。それが真の意味での「共生社会」なのではないだろうか。

例えばカナダでは、一九七〇年代から「多文化主義政策」を進めており、移民や外国人も社会の一員として認め、文化を尊重しながら共に暮らすことが大切にされている。また、学校でも異文化を学び合う時間があり、お互いの違いを知ることで理解や尊重の気持ちが育てられているという。日本でも、こうした政策をとり入れていくことで、もっとお互いを理解し合える社会に近づけていくことができるのではないだろうか。

そのためにはまず、身近なところから変えていく必要が

ある。私自身もこれから、見た目や国籍にとらわれず、目の前の人ときちんと向き合える人間でありたいと思う。そして、だれもが、安心して暮らせる社会のために、自分ができることを少しずつ積み重ねていきたいと強く思う。

「普通」って何？

中学三年生

「女の子らしくない。」

小学生のころ、私がショートカットにしたときに言われた言葉だ。確かにその頃の私は、かなり短い髪型をしていた。けれど、その言葉を聞いたとき、私はモヤモヤした気持ちになった。「女の子らしい」って、何だろう。それって、髪の長さで決まるものなのかな。私はただ、自分が気に入ってその髪型にただけなのに。髪が長いのが「女の子らしい」とされるなら、髪の長い男の子は「男の子らしくない」ことになってしまふのだろうか。髪型なんて、その人の好みで自由に選ぶものであって、性別で決めつけていいものではないはずなのに。

ある時、ネットで「学生服の自由化」について取り上げられている投稿を見かけた。制服をスカートかズボンか自由に選べる学校が増えてきているという内容だった。「素晴らしい」「こういう学校がもっと増えてほしい」といった肯定的な声が多くあがる一方で、「女子なんだからスカートをはくべき」「女子がズボンをはくのは普通じゃない」といっ

んでいることを見逃してはいけけないはずだ。ルールは本来、みんなが気持ちよく生活するためにあるものだ。けれど、誰かの個性を無視してしまうルールなら、見直す必要があるのではないかと思う。

家庭環境についても、同じことが言える。自分の家庭が「普通」だと思っけていても、他の家を知ったときに「ちょっと違うな」と感じることもあるかもしれない。けれど、それは間違いや変なことではなく、その人にとっての「当たり前」や「ふつう」なのだ。たとえば、家族の呼び方が違ったり、ごはんの時間や内容が違ったり、休日の過ごし方が違ったりすることもある。そうした違いは、その家庭のスタイルであって、誰かが「おかしい」と決めつけるものではない。

私は、「普通」はひとつではないと思う。みんなが同じでなければいけないという考え方こそ、間違っているのではないだろうか。

私たちにできることは、まず「そんな人もいるんだ」と受け入れてみることだと思う。「え、それ変じゃない？」とすぐ否定するのではなく、「そうなんだね」と耳を傾けてみる。自分と違う考えに出会ったとき、すぐに線を引くのではなく、一歩立ち止まって考えてみる。そうやっ

た否定的な意見もあった。そもそも、「女子の普通はスカート」なんて、誰が決めたのだろう。そうやって自分の中の「普通」を押しつけることが、誰かを苦しめることがあると、なぜ気づかないのだろう。

また、別の日には同性婚についての投稿があった。そこでは、「気持ち悪い」「子供が産めない同性愛は認めるべきではない」「男は女と、女は男と結婚すべき」などという意見が並んでいた。確かに、同性どうしでは子供を産むことはできない。けれど、それが同性どうしの恋愛や結婚を否定する理由になるとは思えない。その人にとっては、自然に湧いてきた気持ちで恋愛をしているだけだというのに、どうして「気持ち悪い」とか「おかしい」と言われなければならないのだろうか。

人によって、「普通」の感覚は違う。だからこそ、自分の中にある「普通」を、他の誰かに押しつけてはいけないのだ。そういった押しつけは、時に誰かの自由を奪ったり、心を深く傷つけたりしてしまう。

学校生活の中でも、「みんなに合わせる」ことが当たり前のように求められる。けれど、実際には少数派の人が我慢して、多数派に合わせていることが少なくない。「ルールだから」「みんながそうしているから」と言っけて、誰かが苦し

て少しずつ、自分の世界を広げていけたらきっと、もっとやさしい世界になっていくと思う。

そして、誰かのやりたいことや好きなことを認めてあげること。それがたとえ自分の価値観と違っていたとしても、相手の気持ちや個性を大切にする姿勢を忘れないこと。「あなたと違う、私と違う、それがいい。」そう思える気持ちをこれからずっと大切にしていきたい。そして、「みんな違って、みんないい」そんなあたたかい世界を、私たち一人ひとりがつくっていったらと思う。

# 人権に関する標語優秀作品

## 小学校第一学年

ありがとうは えがおになれる まほうのことば  
 やさしさの かずだけこころに はながさく 本郷小 笹沼 叶彩  
 てをつなごう ひとりじゃないって さいきようだ 本郷北小 高橋 歩禾  
 「ありがとう」で せかいじゅうのみんなと なかよくしよう 上三川小 武井 絃采  
 いうまえに かんがえてみよう そのことば 坂上小 川島 柚衣花  
 みんなであいさつ パワーチャージ 北 小 伊東 和奏  
 いっしょにつくろう みんながかがやく あかるいみらい 明治小 網野 七ノ介  
 明治南小 佐久間 望結

## 小学校第二学年

だいじょうぶ みんながいるよ ひとりじゃない  
 じぶんはね せかに一人しかない 本郷小 石崎 稜己  
 さしのべよう ゆう気 やさしさ 思いやり 本郷北小 鈴木 理玖  
 ゆうきだし なかまにいれて みんなでえがお 上三川小 瀧田 琉惺  
 はげまそう こまっている人 かなしい人 みんなの笑顔で 坂上小 海老原 匠真  
 せかかも笑顔 北 小 鶴見 侑樹  
 みんなが みんなを たいせつに 明治小 大島 千鶴  
 やさしい言葉は 一人のなみだを えがおにかえる 明治南小 高橋 羽琉

## 小学校第五学年

「それいいね」 自分とちがう その意見  
 全員が ちがうからこそ いいんだよ 本郷小 黒川 尚紘  
 差別だめ しょうがいあっても 気持ちは同じ 本郷北小 影山 右京  
 見つけよう 一人一人の いいところ 上三川小 大塚 結真  
 みんなの笑顔がみたいから ただそれだけで 生まれる幸せ 坂上小 小川 琉希  
 その思い 誰かの勇気に なれるんだ 北 小 舘野 李雫  
 みんなもつてる優しい心 育てて大きな ハートマーク 明治小 落合 亮太  
 明治南小 飯田 凌空

## 小学校第六学年

優しさを いつも心に 育てよう  
 一人一人を尊重し 明るい未来を 共に築こう 本郷小 小梶 要  
 感謝の言葉「ありがとう」 相手からより 自分から 本郷北小 前田 直政  
 あいさつは されるとうれしい 気持ちいい 上三川小 藤井 美憂菜  
 みんなの「ココロ」で世界が変わる きれいな色に世界を染めたい 坂上小 高嶋 ひなの  
 認め合う 笑顔の道への 第一歩 北 小 前田 快  
 この個性 世界で一つ 君のもの 明治小 森田 凌久  
 明治南小 海老原 竣太

## 小学校第三学年

「ありがとう」「ごめんなさい」 心を開かせる 合い言葉  
 おもいやり わたしもあなたも じゆうな世かい 本郷小 浜野 凜  
 楽しいね 自分がわらうと みんなわらう 本郷北小 坂入 音羽  
 ささえあい えがおになれる たから物 上三川小 田仲 莉乃  
 広がるよ 人を思いやる その気持ち 坂上小 井沢 颯  
 大じょうぶ 一人じゃないよ なか間だよ 北 小 瀧本 蒼偉  
 きみとぼく 見た目はちがっても 心は同じ形だよ 明治小 須藤 愛美梨  
 明治南小 飯田 蓮月

## 小学校第四学年

大丈夫 ひとりじゃないよ いっしょだよ  
 差別なく 分かち合おうよ 人と人 本郷小 鈴木 柚妃  
 見て見ぬふり それははじめの はじまりだ 本郷北小 所 小百合  
 サンキューは 世界をつなぐ 合いことば 上三川小 原 大和  
 やさしさの たねをまいたら 明るい未来 坂上小 上野 溪士  
 やめようよ きずつく行動 こそこそ話 北 小 小池 翠  
 みとめよう 相手の気持ち 大切に 明治小 吉田 杏名  
 明治南小 粕谷 優結

## 中学校第一学年

ネットでは 皆がナイフを 持っている  
 違いを認めて みんなで開こう 未来の扉 本郷中 新井 律己  
 救おうよ 苦しむ友達 ぼくの手で 上三川中 小林 燈翠  
 明治中 神部 元希

## 中学校第二学年

混ざり合う 世界を彩る 個性の色 違いを超えて 輝く笑顔  
 浅い考えの言葉 相手には深い心の傷 本郷中 山崎 琴音  
 よそはよそ、うちはうち 認め合おうよ 考えと心の傷は反比例 上三川中 松本 朋輝  
 明治中 齊藤 永真

## 中学校第三学年

異なる手 互いに取り合い 紡ぐ幸福 本郷中 本多 菜音  
 小さな優しさ 大きな勇氣 みんなでみんなを助けよう 上三川中 小杉 美璃奈  
 それが「普通」って誰が決めた? 明治中 伊澤 里桜

発刊によせて

人権教育資料「だんろ」の発刊にあたり、日頃より上三川町の教育行政並びに人権教育の推進にご理解とご協力をいただいている町民の皆さまに、心より感謝申し上げます。

本資料には、町内の児童生徒が、学校生活や日々の暮らしの中で人権について感じ、考えた作文や標語の代表作品を掲載しています。友だちとの関わりや家族との出来事、身の回りや社会で起きているさまざまな出来事と自分自身の問題として捉え、言葉にした作品です。そこからは、相手の立場に思いを寄せ、人権を大切にしようとする子どもたちの真剣な気持ちが伝わってきます。これらの作品は、私たち大人にとっても多くの気づきや学びを与えてくれます。

現在の日本においても、いじめや差別、インターネット上での誹謗中傷など、人権に関わるさまざまな課題が見られます。また、世界に目を向けると、紛争や貧困、難民問題など、人権が脅かされている現実が数多くあります。これらの問題はいずれも、社会を構成する私たち一人ひとりの意識と行動が問われるものです。

国では、「人権教育・啓発に関する基本計画」に基づき、学校・家庭・地域が連携した人権教育の推進が示されています。栃木県においても、人権の意義や重要性を理解するとともに、相手の立場や権利を大切にする行動をすることができ、そのような人権意識を身に付けることを目指し、人権教育が進められています。

本町では、児童生徒の発達段階に即しながら、各教科や学校行事など学校生活でのあらゆる場面を通して、人権尊重の理念についての理解を深める取組を進めてまいりました。また、学校・家庭・地域が連携し、子どもたちが自ら考え、行動する力を育む教育に取り組んでいます。本資料に掲載された代表作品のみならず、多くの児童生徒が人権作文や標語に取り組み、人権について考えてきたことも、これまでの取組の成果であり、本町の誇りでもあります。

本資料が、町民の皆さま一人ひとりにとって、人権を身近なものとして考えるきっかけとなり、互いの立場や権利を尊重し、支え合う上三川町の実現につながることを心より願っています。

令和八年三月

上三川町教育委員会教育長 増渕 忍



ORIGAMIのまち  
かみのかわ

人権教育資料 No. 44

発行日 令和8年3月1日

発行者	上三川町	上三川町教育委員会
住所	栃木県河内郡上三川町 しらさぎ一丁目1番地	栃木県河内郡上三川町 大字上三川4173番地1
電話	(0285)56-9190	(0285)56-9154